

ロッシーニの死の周辺で

—— 同一週間に銘記すべき3人の死 ——

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』第14号（1999年9月発行）の拙稿「同じ1週間に銘記すべき3人の死」。図版をオリジナルの写真と差し替え、文章を改訂した決定稿をHPに掲載します。（2013年3月）

ギュスターヴ・フロベールがジョルジュ・サンドへ書き送った1869年3月13日付の短い手紙に、次の記述がある。

この冬にはなんと多くの人が亡くなるのでしょうか。ロッシーニ、ベリエ、ラマルティエヌ、メリメ……その他の人たちを別にしても！ あなたに言えることと云ったら陳腐なことばかりです！ やめておきます。でも、あなたを抱擁したい、わが愛しき人よ！

あなたの老いたるトルヴァドゥール Gve.フロベール¹

ロッシーニの死からちょうど4ヵ月後に書かれたこの手紙の中でフロベールが思いを馳せているのは、1868～69年の冬に他界した著名人たちのことである。前日の手紙で彼はジョルジュ・サンドに共通の友人だったルイーダ・カラマッタ (Luigi Calamatta, 1801-69)²の死を伝えており、身近な友の訃報が、とりわけ厳しかったとされるひと冬に訪れた名士たちの死の記憶を呼び覚ましたに違いない。名前の挙がっているロッシーニは1868年11月13日、政治家ベリエ (Pierre-Antoine Berryer, 1790-1868) は同月29日、詩人ラマルティエヌ (Alphonse de Lamartine, 1790-1869) は翌1869年2月28日に他界している。但しメリメ (Prosper Mérimée, 1803-1870) については誤解があり、このときメリメは重病ではあっても存命しており、亡くなったのは1870年9月23日である。

フロベールから死んだものと思われたプロスペル・メリメは1868年11月に療養先カンヌでロッシーニの訃報に接し、ジャンヌ・ダカンに宛てた次の手紙を記している。

気の毒なロッシーニが死にました。噂によれば、彼は少しも発表しなかったが、随分仕事はしていたとか。しかし、私には常にそんなことは凡そありそうにも思えませんでした。彼にとって重大だった金銭上の苦労も、もし実際に何か作っていたとすれば、それを発表すればよかったわけですからね。彼は私が逢った中でも最も機才ある一人で、自ら歌った〈セビーリヤの理髪師〉の曲ほど見事なものを聞いたことはありませんでした。如何なる俳優も比較にはなりません。今年は大家たちには悪年のようです。ラマルティエヌもベリエも甚だ重態だそうです。

(メリメの手紙、1868年11月16日付)³

メリメとロッシーニとの間にどの程度の交際があったのか確認できていないが、この手紙の口ぶりから彼がパリのサロンでロッシーニの歌唱にふれていたのは間違いないだろう。メリメは1826年にジュディッタ・パスタと交流があり、パリのサロンにも出入りしていたのである（ロッシーニはしばしばパリのサロンの余興に〈セビーリヤの理髪師〉のフィガロの Aria を歌った）。とはいえ晩年のロッシーニについては文字通り「噂」しか耳にしていなかったようで、『老いの過ち』と称して多数の作品を作曲していたこともメリメは知らなかった。新作があるならそれを売って金銭上の苦労を解消したらよかろう、という見当違いの意見もこれに起因するようだ。

ところで、フロベールやメリメといった有名作家の記述についてなら、当然世界のロッシーニ研究者たちがチェックしていることだろう。これに対してまだ知られていないと思われるのが、次に紹介するグザヴィエ・マルミエ (Xavier Marmier, 1808-92) の日記と、ロッシーニの死後アンドレ・ジルの描いたカリカチュア (後出) である。両者に共通するキーワード……それが「同一週間に銘記すべき3人の死」である。

11月。同一週間に銘記すべき3人の死：アヴァン、ロッシーニ、ロートシルト。そしておそらく別な3人へと迫り来る死：エンピス⁴、ラマルティエヌ、ベリエ。[中略]

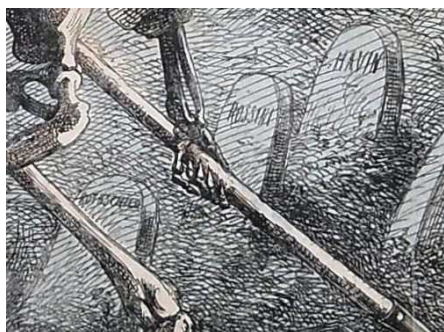
みずから造り上げ、数年前から住んでいたエレガントな邸宅でロッシーニは亡くなった。彼は約15万フランを残して死んだが、その大部分は自分の作品により、またその一部は以前オランプ・ペリシエの名で良く知られていた淫らな娘との信じ難い結婚によって手に入れたものだ。彼女は吝嗇なうえ、恥ずべき職業で5万リーヴルの金を貯めこんでいたという話だ。

彼女はますますケチになっていったから、夫の全集さえ自分の欲望の対象にしかねない。細心の注意を払って夫の未出版作品を整理したのも、金に換えるのが目的なのだ。(マルミエの日記、1868年11月付)⁵

マルミエが日記に記した「銘記すべき3人の死」とは、11月12日に死去した反政府主義者レオノル＝ジョゼフ・アヴァン(Léonor-Joseph Havin, 1799-1868)、13日に死去したロッシーニ、15日に死去したジェイムズ・ド・ロートシルト男爵(James de Rothschild, 1792-1868)のことである。アヴァンは代議士を務めるかわら『世紀(Siècle)』紙主幹として反政府・反宗教の論陣を張った人物、ロートシルトはフランス・ロスチャイルド家の総帥で財界の黒幕にしてロッシーニの親友。この3人の著名人が立て続けに亡くなったことが、当時パリのトップ・ニュースだったのである。ついでながらマルミエの日記には、ロートシルト夫人が年に40万フランをもたらすフェリエールの土地とブローニュの土地、パリのホテル、さらには150万リーヴルの年金を相続し、遺産総計が7億フランと見積られる、と書かれている。ロッシーニが金持ちだったといっても、遺産の額からすればまさに月とスッポンと言って良いだろう。

マルミエの記述で面白いのは、ロッシーニの妻オランプに関するいささかゴシップめいた数行であろう。ロッシーニが「オランプ・ペリシエの名で良く知られていた淫らな娘」と「信じ難い結婚」をしていたというのは夫妻の周囲で常に囁かれていたことで、確かにオランプはかつてパリの裏社交界[ドゥミ＝モンド]で名を馳せた高級娼婦だった。それゆえロッシーニの二度目の結婚は周囲の矚矚をかかったが、夫婦仲はそれなりに良かったらしい。またオランプの吝嗇も伝説的で、マルミエが懸念したようにロッシーニの死後、彼女が次々に夫の遺品と遺稿を売り払ってしまったのも事実である。

マルミエの言う「同じ一週間に銘記すべき3人の死」は、風刺画家アンドレ・ジル(André Gill [本名 Louis-Alexandre Gosset de Guines], 1840-85)の描いたカリカチュアにも登場する。『エクリプス(L'Éclipse)』紙、第1年第45号(パリ、1868年11月29日)に掲載された「死神[=鎌をふるう人](Le Faucheur)」がそれ。ロートシルト、ロッシーニ、アヴァンの墓の前で大鎌をふるう骸骨——「鎌をふるう」は「首をはねる」と同義で、「鎌をふるう人」は「首切り役人」もしくは「死神」を意味する——の姿は、第二帝政期のブルジョワジーの死に対する民衆の皮肉な視線を感じさせる。それはまた、一つの時代の終焉を象徴する死でもあったのである。



左から、ロートシルト、ロッシーニ、アヴァン



アンドレ・ジル《死神》(『エクリプス』パリ、1868年11月29日、筆者所蔵)

LE FAUCHEUR par André Gill (L'Éclipse, 29 novembre 1868.) [Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

¹ ジョルジュ・サンド宛 [1869年3月3日] 土曜日夕刻。 *Gustave Flaubert-George Sand Correspondance*, Flammarion, Paris, 1981., p.221. 日付は編者アルフォンス・ジャコブによる。

² 版画家。一人娘リーナは1862年にサンドの息子モーリスと結婚した。

³ プロスペル・メリメ全集第6巻 (訳者代表=前川堅市。河出書房、1939年) 281頁。(一部字句を変更して引用)

⁴ アドルフ=ジョゼフ・シモニス・エンピス (Adolphe-Joseph Simonis Empis, 1795-1868. 劇作家)。12月11日に死去する。

⁵ Xavier Marmier: *Journal 1848-1890*, DROZ, Genève, 1968, vol.2., pp.90-91. 珍しい文章なので次に引用部分の原文を記しておく。

Novembre. En une même semaine, trois morts mémorables: Havin, Rossini, Rothschild, et selon toute probabilité, trois autres morts imminentes: Empis, Lamartine, Berryer. [...]. Rossini est mort à Passy dans l'élégante demeure qu'il s'était faite là Depuis plusieurs années. Il est laissant environ 150 000 francs acquis en grande partie par son œuvre, et en partie par son mariage, son incroyable mariage avec une fille galante bien connue jadis sous le nom d'Olympe Péliissier, très avare déjà et ayant amassé, dit-on, par son honteux métier, 50 000 livres de rente. Elle est devenue de plus en plus avare, et l'on devra à son avarice les œuvres complètes de son mari. Elle a recueilli avec un soin minutieux chacune de ses compositions inédites pour en faire de l'argent.